

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月25日現在

機関番号：14501

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2011

課題番号：22720083

研究課題名（和文） 明治期における少年雑誌にみる読書観に関する歴史社会学的研究

研究課題名（英文） Historical and Sociological Study on Concept of Reading in Magazines for Children in the Meiji Period

研究代表者

目黒 強 (MEGURO TSUYOSHI)

神戸大学・大学院人間発達環境学研究所・准教授

研究者番号：70346229

研究成果の概要（和文）：本研究では、明治期を代表する出版社である博文館から刊行された少年雑誌（『日本之少年』・『少年世界』・『少女世界』）における読書関連記事を検討した。その結果、少年雑誌に「小説」を掲載することについての合意が形成されているとは必ずしもいえないこと、「小説」の掲載を正当化するような特定のジャンル小説の掲載が試みられていること等が明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：This study examined articles on reading in magazines for children published by *Hakubunkan*, a representative publishing company in the Meiji period. As a result, it was discovered that it was not always common for children's magazines to include "*Shousetsu*" (novels) and children's magazines tried to justify "*Shousetsu*" through pioneering a new genre.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
総計	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：児童文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：近代文学・児童文学・歴史社会学・メディア研究

1. 研究開始当初の背景

申請者はこれまでに青少年向け雑誌を対象とした研究に取り組んできた。

近年では、「明治期主要児童雑誌内容目次データベース」（研究成果データベース、課題番号：188140、代表者：小松聡子）において研究協力者として共同研究に取り組み、明治期における少年雑誌の記事ならびに読者の多様性に気づき、新たな課題設定のもとで研究に着手する必要があると考えるに至った。

研究を開始するにあたって、少年雑誌を対象とした先行研究を検討したところ、少年雑誌に「小説」が掲載されること自体をテーマ

とした研究がほとんど認められないことが判明した。

そこで、教育界を中心として小説有害論が認められた時代背景を踏まえ、少年雑誌が陸続と刊行された明治中期において少年雑誌に「小説」が掲載されたことの同時代的意味の解明を目的とした研究課題を設定することとした。

2. 研究の目的

明治期において、「小説」は青少年に悪影響を及ぼす有害なジャンルとして社会問題化されていた。同時期に成立をみた少年雑誌にとって、「小説」を掲載することは、一方

では有害雑誌として非難されるリスクを抱えることであり、他方では「小説」に親和的な青少年読者を獲得するチャンスであったことが予想される。このような「小説」をめぐる二律背反的な状況は、少年雑誌における読書観の多様性を示唆していると考えられる。

そこで、本研究では、明治期に刊行された少年雑誌における読書関連記事を検討することで、少年雑誌にみられる読書観の多様性を明らかにしたいと考えた。

3. 研究の方法

(1) 検討対象

本研究では、明治期を代表する少年雑誌（少女雑誌を含む）として、『少年世界』（1895年創刊）と『少女世界』（1906年創刊）を主な検討資料として取り上げることとした。その理由は二つある。一つ目は、明治期の出版界を牽引した博文館による定期刊行物であり、明治期の少年少女読者に広く読まれたと考えられるからである。二つ目は、少年雑誌が読者に提示する読書観が読者の性別によって異なることが予想されるからである。

さらに、両誌に先行する少年雑誌として『日本之少年』（1889年創刊）を検討資料として加えた。『少年世界』以前の状況が把握でき、両誌と同じ博文館から刊行されていた雑誌であるため、比較考察する上で格好の雑誌であると考えたからである。

以上の三誌を主な検討資料として本研究を進めた。

(2) 読書観の類型

少年雑誌に掲載された読書関連記事を検討するにあたって、予想される読書観を類型化した。

本研究では、小説有害論のような読書観を適切に位置づける必要があるため、読書一般に対する態度と小説に対する態度とを区別した上で類型化を試みた。その結果、読書観に関して、次の四類型が得られた。

【表1】読書観の四類型

I 読書擁護論	読書一般および小説に対しても肯定的である読書論
II 小説有害論	読書一般に対しては肯定的であるが、小説に対しては否定的な読書論
III 読書有害論	読書一般および小説に対しても否定的である読書論
IV 小説擁護論	読書一般に対しては否定的であるが、小説に対しては肯定的な読書論

以上の読書観のうち、読書有害論と小説擁護論は実際には現れないと予想した。読書を全否定するような読書有害論は少年雑誌の存立基盤を否定することにつながり、読書一般を否定した上で小説のみの読書を肯定するという小説擁護論のロジックは論理的に矛盾していると考えられるからである。したがって、本研究では、読書擁護論と小説有害論の二つのタイプの読書観に照準を合わせることとした。

4. 研究成果

本研究の主な研究成果としては、次の三点が挙げられる。

一つ目は、小説有害論を踏まえながら「小説」の掲載を正当化する読書論として、特定のジャンルの「小説」のみを擁護する「小説選択論」が認められた点が挙げられる。

二つ目は、「小説」というカテゴリーを明示した作品が一貫して掲載されていた点が挙げられる。

三つ目は、『日本之少年』と『少年世界』の二誌において「小説」の掲載を正当化するジャンル小説が認められた点が挙げられる。

そこで、『日本之少年』・『少年世界』・『少女世界』の三誌において、上記の三点がどのように現われていたのかについて、以下に述べることとする。

(1) 『日本之少年』における読書観

① 小説選択論

「小説」の掲載をめぐるっては、読書擁護論・小説有害論・小説選択論の3つのタイプが認められた。

読書擁護論としては、「小説」の効能として教育的価値を見出した記事が挙げられる（菊池熊太郎「教育上小説ノ価値ヲ論ス」1巻20号）。「小説」の感化力をポジティブに捉え、教育に転用するという発想が特徴的であった。

小説有害論としては、「文学」（文脈からして「小説」を指すと考えられる）が風俗を壊乱することを危惧した記事が挙げられる（坪谷善四郎「文学亡国論」3巻6号）。青少年が「小説」に悪感化されることで国が傾くという論調は当時の小説有害論の典型であったと考えられる。

小説選択論としては、「写実派の小説及び恋愛的小説」を有害とみなし、「理科小説」・「歴史小説」・「冒険小説」を有益とみなした記事が挙げられる（柳井録太郎「少年者と小説」6巻16号）。小説有害論に一定の配慮を示しながら、少年雑誌への掲載が正当化できるジャンル小説を明示している点が特徴的であった。

②「小説」の掲載状況

「小説」というカテゴリーを用いた作品の掲載状況については、【表2】の通りであった。

【表2】『日本之少年』における小説の掲載数

巻数	①	②	③	④	⑤	⑥
件数	3	3	1	2	44	38

「小説」の掲載状況が安定するのは5巻以降であり、創刊からしばらくの間は「小説」の掲載を予告しながらも実現できずにいたことから、「小説」の掲載をめぐる混乱していたことが推測される。少年雑誌に「小説」を掲載することが必ずしも自明なことではなかったことが示唆される。

③ジャンル小説

掲載作品のうち、特筆すべきジャンルとして「学術小説」が挙げられる。

「学術小説」は、小説選択論で有益なジャンルとして挙げられていた「理科小説」と同義であり、『日本之少年』の小説観を体現したジャンルであると考えられる。

実際に掲載されていた作品は、宮崎北道ほか訳「学術小説／金星旅行」と思軒居士訳「入雲異譚」である（「入雲異譚」は連載時には角書がないが、5巻12号の表紙で「学術小説」として予告されている）。両作品ともに、「冒険物語」としての結構を備え、「学術小説」としての性質を有しており、小説選択論の主張を支持するような作品であったことが確認できた。

なお、両作品が連載されたのは5巻から6巻にかけてであり、掲載件数に占める割合が約46%と半数近くを占め、掲載件数の上でも同誌を代表するジャンルであった。

(2)『少年世界』における読書観

①小説選択論

「小説」の読書をテーマとした論説記事がほとんど確認できなかったため、読者投稿記事を検討した。その結果、1巻から2巻にかけて生じた小説存廃論争と4巻で生じたお伽噺存廃論争が確認できた。

小説存廃論争については、「小説の紙数毎号十二三頁を費やし而して小説なる者は吾人青年をして柔弱男子たらしむる者なり」（野村初三郎・藤田喜三郎「記者閣下に望む」1巻12号）という投書に対して、「彼の痴情を以て頭尾を満したる小説と此の少年世界の小説とは自ら別あり」（城南小僧「少年世界の小説」1巻16号）という反論が寄せられていた。

お伽噺存廃論争については、記者による「お伽噺存廃に付て」（4巻22号）で、「お伽噺賛成論者」として13名、「お伽噺廃止論者」として7名の氏名が掲載されていた。

以上の事例は「小説」もしくは「お伽噺」の掲載の是非をめぐる論争であり、『少年世界』の読者の間であってさえ、読み物の掲載についての合意が形成されていないことを示唆していると考えられる。

なお、小説選択論としては、「冒険小説」（海洋小説）の意義を主張する読者投稿記事が散見された点が特徴的であった。

②小説の掲載状況

「小説」というカテゴリーを用いた作品の掲載状況については、【表3】の通りであった。

【表3】『少年世界』における小説の掲載数

巻数	①	②	③	④	⑤	⑥
件数	69	40	41	87	82	34
巻数	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
件数	1	0	1	0	12	15
巻数	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱
件数	16	17	27	28	39	37

「小説」の掲載状況については、7巻から10巻を除き、安定していることが確認できた。7巻から10巻にかけて「小説」というカテゴリーが用いられていない背景的要因については、主筆の巖谷小波が渡独している期間と一部重なっていることが推測されるが、要因の特定については今後の課題である。

③ジャンル小説

掲載作品のうち、特筆すべきジャンルとして「お伽小説」が挙げられる。

「お伽小説」は、小説存廃論争とお伽噺存廃論争に対するリアクションとして生じたジャンルであると考えられるからである。

実際に掲載されていた作品は、4巻で20回に渡って連載された巖谷小波「新八犬伝」をはじめとして、4巻以降、断続的に掲載されていることが確認できた。

擬人化されたサブキャラクターを登場させることで「お伽噺」を継承しつつ、同時代の少年読者と等身大の少年を主人公に据えることで「長篇」の「少年小説」への発展可能性が模索されていたことが判明した。

以上の結果は、「お伽小説」が小説有害論者には「小説」が無害化されたジャンル、お伽噺廃止論者には「お伽噺」が小説化されたジャンル、お伽噺擁護論者には「長篇」の「お伽噺」として機能したことを示唆していると考えられる。

(3)『少女世界』における読書観

①小説選択論

「小説」の読書については、沼田笠峰「手帳の中から」（6巻12号）が当時の状況を如実に伝えている。「学校の皆さん、小説のお話ばかりなさるんですもの」という理由で

「小説」に関心を示すが、「小説を読むことが先生に知れたら、叱られるんですもの」という理由から「小説」に手を出ることができないでいる女学生を紹介し、卒業すればいくらでも読めるのだから生徒の間は教科書を読むべきだとの見解を示したものだ。

このような状況を踏まえ、『少女世界』は選書を基本とした読書観を見出したと思われる。たとえば、井原法徒「読書の趣味」(4巻15号)では生徒の読み物を選定したことが報告され、篠田利英「休暇中の心得」(5巻10号)では「教科書以外の読みものについては、よほどその選択に注意しなければなりません」と注意を喚起している。

以上の検討から、読み物が少女に及ぼす悪影響が懸念されていた時期にあって、『少女世界』が有害であるとみなされていた「小説」などの読み物を積極的に位置づけようとしていたことが明らかとなった。ただし、「小説」の掲載を正当化するような特定ジャンルへの言及は確認できなかった。

②小説の掲載状況

「小説」というカテゴリーを用いた作品の掲載状況については、【表4】の通りであった。

【表4】『少女世界』における小説の掲載数

巻数	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
件数	1	12	35	48	48	23	34

「小説」の掲載状況については、4冊しか刊行されていない1巻を除けば、安定して掲載されていたといえる。

女子教育論者の下田歌子が「女学生と読書」(『婦人公論』16巻13号)で、読書の教育的利用を指摘しながらも、「小説」への適用を躊躇していた時代状況を踏まえれば、上記の掲載状況は「小説」の掲載が意図的なものであることを示唆していると考えられる。

③ジャンル小説

掲載作品のうち、特筆すべきジャンルとして「少女小説」が挙げられる。

「少女小説」は、「感傷」をモチーフとしているところに特徴が認められるジャンルである。「感傷」というモチーフは、少女読者が「小説」に感化されやすい性質を有しているという当時の少女観と結び付けられることで、小説有害論者からの攻撃が予想されることから注目することにした。

「少女小説」を検討した結果、寄宿舎生活において「感傷」というモチーフが顕在していることが明らかとなった。たとえば、「寮の姉」(7巻9号、11号)では、同じ寮で暮らしている女学生たちが孤児で肺病を患った真木という寮生を看取るが、真木は病院に入院させられるのを嫌い、寮で死にたいがた

めに薬を飲まずに逝ってしまう。「感傷」というモチーフが寄宿舎における擬似姉妹関係と親和的であることに加え、当時、社会問題化していた女学生墮落問題(寄宿舎が墮落の要因の一つとされていた)に抵触する可能性が指摘できる。

以上の結果は、「少女小説」が少女読者に支持されるモチーフが小説有害論(ひいては女学生墮落問題)と表裏一体の関係にあったことを示唆している。「少女小説」の掲載を正当化することが少年読者向けの「小説」に比べ、より困難であったことが確認できた。今回の調査では、「少女小説」を正当化するロジックを見出すことができなかったため、今後の課題として引き続き検討していく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

① 目黒強、『日本之少年』における小説観のアクチュアリティ、国際児童文学館紀要、査読無、25号、2012年、15-29頁

② 目黒強、『少年世界』における「少年小説」の同時代的意味—小説有害論に着目して—、国際児童文学館紀要、査読無、24号、2011年、1-14頁

〔学会発表〕(計2件)

① 目黒強、『日本之少年』における小説観の検討、日本児童文学学会第50回研究大会(於・東京都市大学)、2011年10月30日

② 目黒強、『少年世界』における「少年小説」の傾向、明治期児童雑誌研究プロジェクト(於・大阪府立中央図書館)、2010年12月25日

〔図書〕(計1件)

① 目黒強、立身出世主義にみる文学少年の近代、222-244頁、稲垣恭子編、教育文化を学ぶ人のために、世界思想社、2011年4月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

目黒 強 (MEGURO TSUYOSHI)

神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・准教授

研究者番号：70346229

(2) 研究分担者

該当者無し

(3) 連携研究者

該当者無し